様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１０６２

研究課題名（和文）中世の百科全書にみるヨーロッパにおけるユーラシア認識の変容と再構築

研究課題名（英文）Transformation and reconstruction of European perceptions of Eurasia in medieval encyclopaedias.

研究代表者
鈴木　道也（SUZUKI, MICHIYA）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：５０２９２６３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　ヨーロッパ地域の人々の対外認識あるいは「ヨーロッパ」認識がいつ頃どのようなものとして形成されたのか、彼らが積極的に対外進出を始めるいわゆる大航海時代以降ではなく、それ以前の時期に焦点をあて、また「百科全書」という特殊な作品類型を分析対象として分析を行った。
　彼らのユーラシア認識にはキリスト教的世界観によるある種の「歪み」があるが、イスラームやモンゴルとの接触を通して、中世とくに13世紀以降、自らが属する共同体の文化的経済的位置づけを冷静に分析し、たとえ異族であっても強制的な改宗や軍事的制圧ではなく、「外交」を進めていこうとする姿勢が現れていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、13世紀から14世紀にかけてラテン・キリスト教世界で制作、編集された百科全書的作品群を分析の対象とし、中世後期におけるラテン・キリスト教世界の人びとが、古代世界からの伝統的な知識と異文化圏からの新たな情報をどのように整理・統合したのか分析するものである。この作業は、近世以降に展開されるヨーロッパ諸勢力の対外進出を支えた知的文化的背景の一端を明らかにすること、つまり現在にいたるヨーロッパ人の自他認識の歴史的解明につながっていくのではないかと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to clarify when and how people in the European region formed their perceptions of the outside world and of ‘Europe’. The focus is not on the period after the so-called Age of Discovery, when Europe began to actively expand abroad, but before that, and the object of analysis is a special type of work, the ‘encyclopaedias’.
 There is a kind of cognitive distortion in medieval Europeans' perception of Eurasia due to their Christian worldview. However, through their contacts with Islam and Mongolia, they have soberly analysed the cultural and economic position of the communities to which they belonged, especially in the Middle Ages from the 13th century onwards. It has become clear that Europeans in the late Middle Ages were willing to promote ‘diplomacy’ rather than forcible conversion or military oppression, even if the other party was an alien race.

研究分野：ヨーロッパ中世史

キーワード：歴史叙述　百科全書　フランス王権　アレクサンドロス大王　イスラーム認識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

フランス王国における 1180 年から 1328 年までの期間は、近年研究者たちから「長い 13 世紀」とよばれ、フランス王国史においてひとつの重要な変革期と位置づけられている。それは伝統的な近代国家生成史論を補強するものではなく、政治文化論の観点から刷新する試みである。またこの 13 世紀は同時にヴァンサン=ド=ボーヴェ『大いなる鑑』をはじめとする数多くの百科全書的作品が編纂されていることから、「（中世）百科全書の時代」とも呼ばれている。

(1)「長い 13 世紀」とは？：1180 年から 1328 年までの期間は「長い 13 世紀」とよばれる。1180 年は尊厳王フィリップ 2 世が若くして王となった年であり、1328 年はフィリップ 2 世から数えて 7 人目、美王シャルル 4 世が亡くなった年である。12 世紀の終わりから 14 世紀はじめにかけての一世紀強の間、とくにフィリップ２世、ルイ９世、フィリップ４世という 3 人の王の治世に、王国はその姿を変える。王国内部では、王の直轄地である王領地が飛躍的に増大した。王領地の拡大で国王の権力基盤は安定し、統治の方法も洗練されていく。十字軍遠征を前にフィリップ 2 世が発した王令は、国に残る者たちに、正しい裁き、いくさへの備え、賦課の徴収、そして貨幣の管理を委ねている。ルイ 9 世は、各地に派遣されたバイイやセネシャルなどの王国役人に綱紀粛正を呼びかけ、一切の法廷決闘を禁止して裁判手続きの整備を図り、王国内における武器の携行を禁じている。かかる政策の決定に際しては、王の近くにいた者たちの役割も見逃すことはできない。レジストと呼ばれる彼らは、ときに国王を唯一の立法者に位置づけ、ときにフランス王権を擁護する論陣を張る。こうした内政の充実に比して、外交、とくに東方との関係においてこの時期のフランス王権はめぼしい成果を挙げていない。第 3 回十字軍に参加したフィリップ 2 世は体調不良を理由に帰国、ルイ９世は第 7 回と第 8 回の十字軍を率いるが、一度目の遠征ではエジプトで捕虜となり、二度目は病に倒れアフリカのチュニスで没する。フィリップ 4 世はイル・ハン国のアルグン・ハンの求めに応じ、彼と結んで聖地を回復する計画を立案した。モンゴル勢力との連携は、ルイ 9 世の頃からのアイディアであったが、この壮大な計画が実現にいたることはなかった。

(2)「百科全書の時代」としての 13 世紀：13 世紀はまた同時に「百科全書の時代」でもあった。翻訳を通じて流入したギリシア語・アラビア語・ヘブライ語文献に記された膨大な知的情報を体系化しようとする試みが本格化するのがこの時代であり、ヨーロッパにおける「知の歴史」の系譜のなかで重要な位置を占めている。主な作品として、アレクサンダー＝ネッカム『事物の本性について、そして「コヘレトの言葉」に関して』、バーソロミュー＝オブ＝イングランド『事物の性質について』、トマ＝ド＝カンタンプレ『事物の本性について』、そしてヴァンサン=ド=ボーヴェ『大いなる鑑』などがある。ラテン語でまとめられた彼らの作品は多くの写本を通してヨーロッパの知的サークルのなかで共有されるが、13 世紀後半から 14 世紀にかけて俗語に翻訳され、王国役人など俗人エリートたちのなかにも広がっていく。さらに彼らの作品は、マッパムンディ（mappamundi）と呼ばれる世界図（図像）のかたちでも表現される。権力観や王国観、あるいは世界観にかかわるこうした新しいタイプの言語的・非言語的表象が、限られた知的サークルの範囲を超え広く普及しはじめる。覚醒し始め、王国の内部から外部へと関心を向けつつあった中世ヨーロッパの王権が、同じ時期に体系化されつつあった学知に出会ったとき、権力と知はどのように結託するのか、あるいは対抗するのか、これが本申請課題の背景である。

２．研究の目的

上記の「問い」から、本研究では、13 世紀から 14 世紀にかけてのフランス王国で編集、制作された百科全書的作品群、とくにヴァンサン=ド=ボーヴェの作品『大いなる鑑』とその俗語翻訳版を対象に、そこに記された異文化圏に関する記述の成立過程と内容、さらにその政策・意思決定への影響を探ることで、中世ヨーロッパの人びとが異文化圏、とくに東方ユーラシア世界をどのように認識し、そしていかなる「外交」政策を展開していたのか、中世における学知と政治との関係を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

百科全書に含まれる情報は膨大であり、本研究ではそのなかから以下の研究課題を設定した。
(1)<中世のアレクサンドロス像>：アレクサンドロス大王は、中世の文芸活動においてアーサー王と並ぶ人気を誇っていた。ラテン語で編纂された百科全書的著作のなかで、あるいはそこから俗語に翻訳された作品のなかで、アレクサンドロスがどのように描かれ、また翻訳されているかを明らかにすることで、13 世紀後半から 14 世紀前半の王権とくにフランスにおけるカペー・ヴァロワの両王朝およびその周辺の人々が思い描いていた統治者像について考えることが可能になると思われる。

(2)<ヴァンサン=ド=ボーヴェのイスラーム認識と『歴史の鑑』改訂事業>：ドミニコ会士としてパリで百科全書の編纂事業に従事していたヴァンサン=ド=ボーヴェは、1246 年、ロワイヨモンの地にフランス国王ルイ 9 世が建てたシトー派修道院に招聘され、長くこの地に滞在することとなる。すでに招聘時点で彼の作品『大いなる鑑』はある程度完成していたが、ルイ 9 世が十字軍遠征に失敗したことで、かえってヴァンサンは東方世界に強い関心を抱くこととなり、その結果『大いなる鑑』に対して大規模な改訂作業が実施されることになる。改訂作業そのものについてはよく知られており、王権の意図が反映していた可能性についても指摘されているが、イスラーム世界についての記述がどのように改訂されたかという点について分析した研究はこれまでなく、当該研究課題だけではなく、中世の百科全書研究全体にとっても意味を有すると思われる。

(3)<百科全書のなかのモンゴル帝国>

ローマ教皇によってモンゴル帝国に派遣されたフランシスコ会士プラノ・カルピニやドミニコ会士サン・カンタンのシモンが 13 世紀半ばに記したモンゴル帝国に関する報告書の内容は、いち早く『大いなる鑑』などの百科全書に取り込まれている。シモンの報告書は原文が失われており、百科全書の記述は貴重である。百科全書写本のなかには報告書の記述をもとに描かれた挿絵が添えられたものもある。ここではとくにフランス・ヴァロワ王権の保護下で『歴史の鑑』を翻訳したジャン・ド・ヴィネ-の作品のなかでこれらの報告書の記述がどのように編集されているか分析したい。

４．研究成果

(1)2020 年度：予定していた海外史料調査が困難となり、また国際研究集会など情報交換の機会も著しく減少したため、残念ながら新しい知見を得ることはほとんどできなかった。主な成果は、昨年度から行っている研究動向紹介のための翻訳活動（「《翻訳》13 世紀に歴史を～(3)」）、昨年度開催された学会シンポジウムの内容を発展させた論文の公表（「<Reditus～」）あるいは、概説書の執筆（「「長い 13 世紀」～」）など、従来の研究活動の延長線上に位置づけられる成果が中心となっている。

(2)2021 年度および 2022 年度：当該年度は以下の研究活動を行った。①13-14 世紀に編集された百科全書的著作関連写本の網羅的収集と系譜関係の確認/②バチカン文書館やフランス国立図書館などに収蔵されているキリスト教諸勢力とモンゴル諸ウルス間の外交関係文書関連写本の網羅的収集と系譜関係の確認/③百科全書的作品に記されたモンゴル帝国に関する諸情報の整理（記述内容・記述形式・記述方法の総合的分析）/④外交関係文書の内容・形式・語法の総合的分析/⑤百科全書的作品に記されたヨーロッパ知的エリートのモンゴル認識とその変容と、外交関係文書に現れる諸政治体の外交政策とその変化を相互に対照させながら分析。主な成果としては、「《翻訳》13 世紀に歴史を～(４)」の他、３点の論文として、論文「ヴァンサン=ド=ボーヴェ編『歴史の鑑』にみる 13 世紀フランス王国のイスラーム認識について」（ムハンマドの生涯とイスラームの教義が中世のフランス王国においてどのようなものとして認識されているかを確認）、論文「『歴史の鑑』のなかのアレクサンドロス大王」」（異世界の統治者であるアレクサンドロス大王が、キリスト教の発展とその教義の拡大に貢献する理想的な君主像として位置づけ直されていく過程の確認）、論文<L'Historia Tartarorum de Simon de Saint-Quentin et le Speculum Historiale>（中世ヨーロッパのキリスト教聖職者がモンゴル帝国の政治と文化をどのように認識していたのか、その再構成を目指したもの）がある。なお、学会発表「シンポジウム 13 世紀のヨーロッパ・キリスト教世界とモンゴル帝国　趣旨説明」は、本研究課題に関連して、複数の研究者（モンゴル帝国史、教皇庁史、中世ロシア史、ビザンツ帝国史、北欧史、中世シリア史）の参加を得て実施したシンポジウムの全体構想を提示したものである。

(3)2023 年度：2022 年度までの研究を経て、本研究課題をいわゆるグローバル・ヒストリー研究のなかに再置する試みを進めた。本研究は「前近代ユーラシア世界における文化交流」に関して、その実態をヨーロッパ世界の側から照射するものとなると思われる。2022 年度に開催したシンポジウム「13 世紀のヨーロッパ・キリスト教世界とモンゴル帝国」の成果を、雑誌『西洋史研究』において「2022 年度大会共通論題～」として討議の様子を含めまとめた。また論文<L’évolution des perceptions de l’islam～>は、 中世の百科全書編者たちのなかでイスラームの信仰とその共同体がどのように認識されていたか分析したものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 鈴木道也	４．巻 47
２．論文標題 「《翻訳》13世紀に歴史を書くということ　―プリマと『王の物語』（4)―」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『東洋大学文学部紀要』	６．最初と最後の頁 262-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木道也	４．巻 48
２．論文標題 「ヴァンサン=ド=ボーヴェ編『歴史の鑑』にみる13世紀フランス王国のイスラーム認識について」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『東洋大学文学部紀要』	６．最初と最後の頁 264-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木道也	４．巻 59
２．論文標題 「『歴史の鑑』のなかのアレクサンドロス大王」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『東洋大学大学院紀要』	６．最初と最後の頁 189-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木道也	４．巻 46
２．論文標題 「《翻訳》13世紀に歴史を書くということ　―プリマと『王の物語』(3）」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『東洋大学文学部紀要』	６．最初と最後の頁 433-352
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木道也	4．巻 45
2．論文標題 「《翻訳》13世紀に歴史を書くということ　－プリマと『王の物語』（2）」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『東洋大学文学部紀要』	6．最初と最後の頁 272-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木道也	4．巻 12
2．論文標題 「<Reditus Regni ad Stirpem Karoli Magni> 再考」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『西洋中世研究』	6．最初と最後の頁 50-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 鈴木道也
2．発表標題 シンポジウム 13世紀ユーラシアにおけるキリスト教世界とモンゴル帝国　趣旨説明
3．学会等名 西洋史研究会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 春田直紀、新井由紀夫、D.Roffe	4．発行年 2022年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 580
3．書名 『歴史的世界へのアプローチ』	

１．著者名 有光秀行、鈴木道也	４．発行年 2024年
２．出版社 八坂書房	５．総ページ数 308
３．書名 『脇役たちの西洋史―9つのライフ・ヒストリー』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関